HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	キリシタン版の日本語と印刷術についての研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	白井, 純
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	乙第7145号
Issue Date	2021-09-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/82997
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Jun_Shirai_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　白　井　　純

主査　教　授　加　藤　重　広
審査委員　副査　教　授　藤　田　　健
副査　教　授　冨　田　康　之
副査　名誉教授　池　田　証　壽（北海道大学）

学位論文題名
キリシタン版の日本語と印刷術についての研究

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は，文語体の宗教文献（キリシタン版と称する）を対象とした国語学的研究である。特に，キリシタン版の文献にみられる特殊な日本語の文法と，仮名と漢字を用いる国字本の表記，また，それらの活字を用いた印刷術の 3 つの大きな研究テーマのもとに，多角的かつ多層的な分析を加えている。キリシタン版の日本語の研究の中でも，資料編 5 冊計 1578 頁に及ぶデジタルデータを準備して，組織的かつ広範に展開させた研究は例を見ないということができる。以下では，文法研究，文字・表記研究，印刷術研究に分けて述べる。

キリシタン版の日本語の文法研究において，本論文はヨーロッパから来た宣教師の日本語学習という観点（これは言語接触の視点も含む）を導入して論じることによって新知見をもたらしている。ジョアン・ロドリゲスの『日本小文典』は全般にラテン語文法を基盤に日本語を捉えようとしているが，中でも敬語法については日本語文法の特徴として扱いが異なる。第 2 部と第 3 部では，格助詞と敬語法の関係に着目し，与格助詞では「に」よりも「へ」に上位待遇性があることを見出し，日本語では起点格と扱われる奪格のうち「より」が動作主標示に用いられるときに聖人や神といった上位者から低位者への動作を表す構文に現れることをデータから論証している。また形式名詞の使用にも敬意の違いが反映しているとし，上位待遇性がある場合には「者」に通じる「もの」を回避するため「ものなり」が現れにくいと分析している。これは運用上の動機を推定している点で重要な指摘である。また，高位者を助動詞「らる」で公尊敬待遇する当時の日本語の運用に従わず，また，二重敬語「させ給ふ」「させらる」もあまり用いることがなく，「給ふ」「らる」を無標とする点で，キリシタン版のなかで尊敬標示に一定の階層性があることを明らかにした点も重要な成果である。

第 4 部から第 6 部は表記・文字に関する研究であり，助詞の仮名用字法には明確な特徴がない前期国字本に対して格助詞や同じ仮名の連続で組織的な仮名用字法を用いる後期国字本は大きな相違点を持つこと，キリシタン版の疑問符の用法の観察からは分節記号の機能を優先させた結果引用助辞の直後に疑問符を配置する事象が生じたことを明らかにしている。また，キリシタン版国字本と漢字辞書『落葉集』の間で定訓が強い関連性を持つことを，『落葉集』の同訓異字と宗教書『ぎやどぺかどる』の用例比較により確認し，さらに定訓が『日葡辞書』における漢字表記を導く注釈としても機能する，合理的な設計であること，を指摘している。『落葉集』の研究では，定訓の安定性が，漢字と和訓の結びつきを定義しており，同時に辞書内での相互検索可能な手段としても機能しているとした。さらに漢語を掲載する「本篇」が形式上類似する古本節用集からの引用によって成立したとする先行研究を修正し，常用性の高い漢字を選び出し，それを繰り返し使用することで構成可能な漢語を列挙したとした知見は国語学的にも重要な意味を持つと評価できる。

印刷術研究では，キリシタン版の印刷術を分析している。『落葉集』は漢字辞書という性格上活

字制作コストを考慮して在庫数を確保するに留まったと推定できること，印刷する文献の内容に依存する字種と在庫数の管理は難しい課題で，量産型金属活字と，木活字を含む非量産型活字の双方を組み合わせるハイブリッド印刷が，キリシタン版の印刷術が当初から想定していた日本語表記への合理的な対応方法だったこと，原田版『こんてむつすむん地』では連綿活字の頻度の高い形態素に優先的に対応する後期国字本とは異なる運用面の特徴を持つこと，『ひですの経』では一部の連綿活字にみられる傷の特徴から金属母型ではなく，粘土鋳型等を利用した可能性があること，などを解明しているが，これは仔細な観察に基づく分析であり，印刷出版に関わる文献学的研究としても重要な成果である。

以上に加えて，孤本『ひですの経』の原本調査に基づき，語彙と表記にはキリシタン版の規範性に反する例が多いこと，キリシタン版は活字印刷段階での校正によって修正し統一することで高い規範性を実現していたこと，『妙貞問答』との比較からその著者不干ハビアンが『ひですの経』編集にかかわった可能性が低いこと，なども指摘しており，リオ本『日葡辞書』発見の経緯と概要の報告とあわせて，重要な成果となっている。

・学位授与に関する委員会の所見

本論文が国語史・文字研究・印刷術研究にまたがる，国語学上の重要な成果をいくつも含む点は，高く評価された。細部における不十分な記述などが散見されたが，口述試験では必要な説明がなされ，問題点についても自覚していることが確認された。以上を踏まえ，本審査委員会では，全員一致して本論文が，博士（文学）の学位を授与するのに相応しいとの結論を得た。

以上